
恋時雨

雪丞丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋時雨

【Nコード】

N72530

【作者名】

雪丞丸

【あらすじ】

銀魂キャラ達との、夢小説。

短編…だと思います。

必ず、注意書きをお読み下さい。

注意書き

ここは、夢の世界

今宵も夢の世界で、咲き乱れましょう。

銀魂のキャラ達と、恋愛を楽しむ妄想…げふんげふん。

銀魂のキャラ達と、恋愛を楽しむ夢小説です。

短編です。

何話で終わるかは、判りません^^；

短編という事で、ダラダラと長くは書かない…氣でいます↑

なるべく、一、二話で終わらせたいです!!

書いていくキャラは、銀時・高杉・土方・沖田。

正直…この4人しか書けない^^；

あと注意なんです、微裏・裏あるかもです。

タイトルの後ろに目印つけます。

微裏↓

裏
↓

拙い文章ですが、宜しくお願いします m (_ _) m

この想い…桜と共に (銀時) (前書き)

季節無視ネタ…

この想い…桜と共に（銀時）

私が銀さんと出会ったのは、夜桜が綺麗な日。

彼氏に振られて、デロンデロンに酔っていた私に声をかけてくれたのが、万事屋の主人こと坂田銀時。

屋台で、私の愚痴を親身に聞いてくれた人。

それがキツカケで、よく二人で飲み歩くようになった。

ただの飲み仲間…という関係。

それから特に進展する事もなく、一年が過ぎた。

だけど…私の心は、確実に銀さんに向いている。

銀さんは、どうなのか判らない。

怖くて聞けない。

何故なら…

銀さんには、お妙さんと言う綺麗な人が近くに居るから。

私は意を決して、二人が出会った日に銀さんを飲みにつつた。

……これで最後にしよう。

そう思つて。

・

いつもの屋台。

二人で他愛もない会話をして、飲んだ。

飲んで飲んで飲みまくった。

銀『お…おい！大丈夫か？』

「大丈夫れすう！！これくりゃい…何ともありまへー…うつ」

銀『ちょー！待った待った！！』

フラフラと、屋台から出されて近くの川に……吐いた。

最悪…。

最後の最後にコレか…。

「すんませーん！ちょっと、飲みすぎちゃった」

笑いながら振り返ると、心配そうな顔をした愛しい人が居た。

……そんな顔しないでよ。

余計に離れられなくなるじゃない。

笑ってよ。

笑い飛ばしてよ。

バカだなんて…笑ってよ。

コレが最後なんだから…。

見たくないよ。

銀『お…おい！どうした！？何で、泣くんだ！？』

「…え？」

銀さんに言われて、初めて気付いた。

自分が泣いてる事に。

「へ…へへへへ。どうしたんだろ。泣く事なんて、何もないのに…
…っ」

次々と溢れ出す涙。

止めようとしても止まらない。

まるで、私の銀さんに対する想いのように。

止まらない。

銀『いや！本当に大丈夫か！？病院……』

どさくさに紛れて、銀さんに抱きつく。

最初で最後のワガママ。

「……き」

銀『え?』

「銀さんが…好き」

もうダメ。

諦めきれない。

ハッキリ、銀さんの口から気持ちを知りたい。

そして…身を引きたい。

でも、やっぱり聞くのが怖い。

「銀さん…今まで、ありがとう」

名残惜しいけど、銀さんから離れる。

ゴシゴシと涙を拭いて、精一杯の笑顔に向けた。

「もうコレでお終い!……諦めるから」

会計を済ませようと、立ち上がったとき

後ろから、お酒と甘い匂いに私の体が包まれた。

銀『ばーか。何、言ってるの？一人で、自己解決してんじゃねーよ』

耳元で囁かれる、甘い声。

心臓が一際、大きく高鳴る。

「だ…だって…」

後ろに居た筈の銀さんは、素早く私の目の前に来た。

銀『だってクソもねーよ。俺だって…お前と同じだ』

「それって…」

銀さんは、妖しい笑みを浮かべて顔を覗き込んだ。

銀『一回しか言わねーぞ？……俺も、お前が好きだ』

「銀…さん…」

お酒のせいなのか、ほんのり赤い銀さんの顔が近付いてくる。

「……うおえつぶ!!」

銀『え！？ちょ…お前!!今、いい所!!ムード壊すな…って!ぎやああああ!!…!!』

初めて、お互いの気持ちが通じ合った日。

夜桜が綺麗な日。

……そして、銀さんの服を汚した日。

一生、忘れる事が出来ない日になった。

銀『お前…コレどーしてくれんの？』

「いめんなさい」

銀『ムード壊すし…汚すし…どーしょーもねーな』

「いめんなさい」

銀『お仕置き』

「！？」

E
N
D

・（後書き）

最後の最後に…。
お食事の人…すみません。

煙草 (土方) (前書き)

恋人設定で主人公は女隊士。

煙草（土方）

あの人は、いつも煙草を吸っている。

私が止めてって言うっても、止めてくれない。

吸いすぎは、体に悪いのに…。

でも…この匂いは、あの人の匂いだから…。

なくなると、寂しい気もする。

「ねえ…十四郎」

土『何だ？』

「せめて、見回り中は煙草止めようよ」

土『無理だな』

「煙草くさい」

土『しょーがねーだろ？止められねーんだからよ』

このやり取りは、初めてではない。

日常茶飯事。

いつもの如く、私は十四郎から離れる。

私、早死にする。

だって…いつも一緒に居るから。

煙草の煙は、吸わない人にしたら毒なんだよ？

しかも、十四郎が一日に吸う煙草の本数は本当にヤバイ。

そんな、ある日…。

・

「ゲホッゲホッ」

土「おい。最近、咳酷いな」

「うーん…風邪かなあ」

やたらと咳が出る。

かれこれ、一週間位は続いていると思う。

何だか、体もダルいし。

沖「どうしたんですかい？」

「あ…沖田くん。何だか、咳が続いて」

沖「咳…ですかイ」

沖田くんは、私の横に居る十四郎を見た。

十四郎は、相変わらず煙草を吸っている。

土「何だよ」

十四郎は眉をしかめながら、沖田くんに視線を移した。

沖『いえ…これは、あくまで俺の推測ですがねイ。肺でもやられてるんじゃないですかイ?』

肺? 何で肺?

私が疑問符を浮かべながら、十四郎と顔を見合わせていると沖田くんが溜め息をついた。

沖『土方さんは、アンタの前でも煙草吸ってますよねイ? 煙草の煙は、吸わない人にとっては猛毒なんですぜイ』

……確かに。

沖田くんの言うとおりだ。

土『総悟!! それは、本当か!?』

十四郎が、沖田くんの胸倉を掴んで叫んだ。

沖田くんは、そんな十四郎を冷ややかな目で見る。

沖『知らなかったんですかイ? ダメですねイ。まあ、俺も聞いた話なんで絶対とは言えませんぜイ』

土『おい! 病院に行くぞ!!』

「え?... きゃあ!」

十四郎は、沖田くんから手を離すと私を抱きかかえた。

近『おう。トシ。血相変えてどうした？』

ソコに近藤さんが来た。

何を勘違いしてるのか、ニヤニヤしている。

土『コイツを病院に連れて行く！！』

近『病院？つか言って、ホテルでも…ふごお！！』

十四郎は、近藤さんを踏み付けて屯所を出た。

医『ただの風邪だね』

土『は?』

病院に着いて色々検査した後、先生の一言がコレ。

十四郎は、先生に『本当にか!?』と食って掛かる。

医『ドコも悪い所は無いし、症状からして風邪だよ』

十四郎は落ち着いたのか、安堵の溜め息を吐いた。

土『ったく。総悟の野郎…脅かしやがって』

医『あつ。そうそう。一言付け加えておくけど、非喫煙者でも煙を吸う事によって心筋梗塞とかの危険性が高くなるよ。だから、煙草は控えてね』

先生の言葉が効いたのか、十四郎は私の前ではあまり吸わなくなつた。

どうしても、私が居る時に煙草が吸いたくなる時は離れて吸う努力をしてくれる。

つくづく、愛されてるんだなあと思う。

十四郎からする煙草の匂いが、日増しに少なくなってくる。

嬉しい反面、寂しい気もする。

「ねえ、十四郎」

土「何だ？」

「どーしても、煙草が吸いたくなった時は私の前でも吸っていいよ」

土「でも……」

「私に何かあった時は、十四郎が助けてくれるでしょ？」

私の言葉に、十四郎は吸っていた煙草を消して近付いてきた。

土「つたりめーだろ？」

「ふふ。ありがとう」

ギュツと抱き寄せてきた十四郎からは、煙草の匂いがした。

不思議と、愛おしく思えてくる。

近「ちよつとちよつとお」

沖「何でイ何でイ。見せ付けてんじゃねーよ。土方コノヤロー」

「!？」

土「ちよー！お前ら！いつから見てたー！！！！」

近・沖「わー。逃げろー」

何だかんだで、私は十四郎から煙草の匂いが無くなるのは嫌なんだ
と思う。

それが、彼の匂いだから。

END

・（後書き）

何だかグダグダ…。

甘いキス (銀八) (前書き)

生徒と先生

甘いキス（銀八）

誰も居ない教室で、私は一人で唸っていた。

机の上には、白紙の問題用紙。

国語のテストで赤点を取ってしまい、補習をさせられている。

「わ…判んないよお」

時間は五時を回っている。

ガラガラ

銀『どーだ？少しは、進んだか？』

「……」

銀『……はあ』

うな垂れる私を見て、銀八先生は溜め息を吐いた。

帰りたい。

そんな事を思ってる私をヨソに、銀八先生は椅子を動かして隣に来た。

銀『こんな問題も解けねーなんてな』

「すみません」

申し訳なくて、頭も上がらない。

銀『今日は特別だ。次はねーからな』

どうやら、教えてくれるらしい。

私は笑顔で顔を上げて、銀八先生の方を見た。

それから一時間…

先生の説明を聞きながら、問題を解いていった。

「で…出来たー!!」

銀『こんな生徒は初めてだ』

やっと終わった開放感から、はしゃいで銀八先生の言葉は聞こえなかった。

「帰ります!!さようなら!」

帰ろうとする私を、銀八先生が止めた。

銀『ちよつとちよつと!先生が残って教えてあげたのに、もう帰るの?』

「いや…だって…もう帰る時間だし」

ドアに手をかけた私の方に、銀八先生が近付いてくる。

銀『ご褒美…ちよーだい』

ご褒美…ご褒美って…？

・

まさか…

学校にお菓子持ってきてたのバレてた！？

仕方なくカバンを漁り、チョコを出して銀八先生に渡した。

銀『何だ、お前。こんなもん学校に持ってきてたのか？』

あれ？

知ってたんじゃないの？

じゃあ、出さなきゃ良かった。

銀八先生はチョコを袋から出して、口に含んだ。

銀『これ…新作か』

「よく判りましたね」

家に帰って、ゆっくり味わおうと思ったのに。

銀八先生に取られるなんてえええええ！！

不貞腐れる私に、銀八先生がチョコを差し出してきた。

銀『やる』

いやいや。

それ、私のチョコだし。

そんな事を思いつつも、銀八先生からチョコを受け取って口に入れた。

「うう…美味し…」

チュツ

銀『ご馳走様』

……え？

何？今…キスされた？

呆然としながら、目の前に居る銀八先生を見上げた。

銀『これで、お前は俺のもんな』

ニヤツと笑う銀八先生は、声も出せない私に追い討ちをかけるように、二回目のキスをしてきた。

口の中に、チョコの甘い匂いが充満してくる。

不思議と、抵抗する事を忘れて銀八先生に身を委ねていた。

自分でも気付かないうちに、私は銀八先生を好きになっていたんだ
ろうか。

銀『このまま、ホテルでも行っちゃおう？』

「変態」

END

・（後書き）

またもや、グダグダ

保健室（高杉・教師）

裏注意！！（前書き）

高杉は保健医。先生と生徒設定

保健室（高杉・教師） 裏注意！！

「高杉…先生…」

高『高杉先生じゃねえだろ？』

「晋…助…」

高『良い子だ』

晋助はそう言いながら、私の唇にキスを落とした。

生まれた姿で、抱き合う。

しかも…保健室で。

鍵はかけてあるし、表には「不在」という看板をかけてあるから誰も入ってこない。

イケない事してるのは、判ってる。

でも、この気持ちは止められない。

荒い息を吐きながら、晋助は私の横に寝転がった。

……私達は、教師と生徒。

付き合ってもいないのに、体の関係になってしまった。

誘ったのは、私からだけど。

晋助からしたら、私は数多く居る女の中の一人でしかない。

判りきってるのに…独り占めしたいって気持ちになる。

服を着る晋助の背中を見て、余計にその思いが込み上げて来た。

高『…服、着ねえのか？お望みなら…もう一回ヤツても良いぜエ？』

はだけた胸元が愛おしい。

私が頷くのを確認して、顔を近づけて来た……が。

高『…やめた』

「え？」

晋助はそう言うと、ソップを向いてしまった。

・
呆氣にとられる私をヨソに、晋助はボタンを閉めて白衣を羽織った。

やっぱり…私は、もう必要がないんだ。

悔しくて…哀しくて…涙を堪えながら、制服を着た。

ドアの前まで行って、後ろを振り返る。

晋助はキセルを咥えながら、外を見ていて私の方を振り向く気配を見せない。

気付けば、涙が頬を伝っていた。

私は泣き顔を見られないように、鍵を開けて保健室を後にした。

それからというもの。

私が保健室に通う事はなくなった。

たまに保健室の前を通れば、中から楽しそうな女の声が聞こえてくる。

その度に胸が締め付けられ、涙が溢れそうになる。

そんな状態が一ヶ月続いたある日。

私は倒れた。

原因は、風邪。

熱があるのは知ってたけど、晋助が居る保健室に行きたくなくて我慢してた。

銀八先生に担がれて、保健室に向かう…。

「先生…保健室は嫌…」

銀『あ？何でだ？』

「……言えない」

銀『ワガママ言っな』

私の小さな抵抗は空しく、保健室に着いてしまった。

銀『高杉!!』

銀八先生がドアを勢い良く開けて、ズカズカと中に入っていく。

高『何だア?……お前』

意識が朦朧としていて、目も開けられないけど……声で判る。

私が担がれてきた事に驚いてるみたい。

銀八先生がカーテンを開けて、静かに私を寝かせた。

銀『熱がある』

高『…何で、倒れるまで我慢してんだア?』

少し、イラついてるようなトーン。

保健室から出たいのに、体が動かない。

銀『理由は言わねーんだが、保健室は嫌だって言ってたぞ?』

高『……』

銀八先生の言葉を聞いて、晋助は黙ってしまった。

銀『何があつたか、知らねーけどよ。コイツを傷つけんなら、俺が貰つてくぞ?』

……え?

銀八先生の言葉に、私の心臓は高鳴った。

晋助は、それを聞いて何て言うんだろう。

しばらくの沈黙が続いて、晋助が口を開いたけど……私は睡魔に襲われて意識を失った。

「……ん」

どれだけの時間、寝てたんだろう。

目を閉じてても判る。

もう夕方だ。

赤い夕日が、カーテンを通して射してくる。

高『気付いたか？』

その声に反応して、勢い良く目を開けた。

横を見ると、相変わらずの無表情な晋助が居た。

「す…すみません。今すぐ、帰りますんで」

晋助は起き上がろうとする私の肩を掴んで、ベットに押し倒した。

……何だか、怖い。

怒ってる…？

高『……何で、一ヶ月も来なかったんだア？』

その言葉に、私は目を丸くした。

高『一ヶ月間、何をしていたって聞いてんだ。まさか、他の男と遊んでた訳じゃあるめえなア？』

キョトンとしている私に、少し厳しい口調で睨みつけてきた。

「あ…遊んでないもん！！し…高杉先生には関係ないです」

ふいつと顔を横に背けた。

怖い。

いつもの晋助じゃない。

逃げたくて暴れようとするけど、馬乗りにされてるせいで動けない。

・**(前書き)**

やっと、終わり

・

高『…俺には関係ねえだ？』

いつもより低い声に、部屋の空気が張り詰めた。

恐怖でカタカタと、体が震え始める。

直視出来ない。

私はソッポを向いたまま、解放されるのを待った。

しかし、晋助はそれを許さない。

高『答える。一ヶ月来なかった理由と、俺には関係ねえと言った意味を』

ギリツと肩に力が込められる。

痛い。

「…………高杉先生は」

高『あ？』

「し…晋助は、私が居なくても大丈夫でしょ？代わりはいくらでも居るし…」

言ってて哀しくなった。

目頭が熱くなってくるのが判る。

「このまま、晋助と居たら独り占めしたくなる。だから…」

私が言い終わらない内に、晋助は制服のボタンを外して顔を近づけてきた。

「……っっ」

鎖骨の辺りに、チクツと痛みが走り晋助の顔が離れた。

高『バカじゃねえのかア？他に女が居る？ふざけた事ぬかしてんじやねえよ』

ニヤツと妖しい笑みを浮かべると、私の唇にキスを落としてきた。

壊れ物に触れるような、優しいキス。

高『最初から、おめえは俺のもんだ。銀時にも…誰にも渡しやしねえよ』

晋助の言葉に、私の目から涙が溢れてきた。

「じ…じゃあ…」

高『ああ。一回しか言わねえから、よく聞いとけ』

私の耳元に顔を近づけると、甘い声で『愛してる』と囁いた。

始まりは、最悪だったかも知れない。

でも、結果的にこうなれたから良しとしよう。

「あの…何してるの？」

高『あ？何って…続き』

「私…病人なんですけど」

高『構いやしねえよ』

「ちょ…エロテロリストおおおお…!!」

END

・（後書き）

暴走しました。

高杉はエロテロリスト。

ってか、これは裏なんでしょうか？

一応、描写には気をつけましたが…。

幼馴染み（沖田）（前書き）

幼馴染み設定。

幼馴染み（沖田）

小さい頃から一緒に

よく喧嘩もした。

よく苛められて、泣いてた総悟を守ってたっけ。

気付けば…

総悟は背も高くなって、格好良くなってた。

昔みたいに苛められる事も、泣く事もなくなって

逆に苛める方になってる始末。

皆からは、ドS王子なんて呼ばれてる。

剣の腕も見込まれて、真選組入り。

どんどん、私の知らない総悟になってく。

そんな事があって、私達は昔みたいに会う事もなくなった。

簡単に言えば、疎遠になったのだ。

携帯の番号もメールアドレスも知ってるけど、掛かって来る事もないし私からも掛けない。

そんな状態が続いてた、ある日。

私は、ひよんな事から銀さんに会って万事屋で働く事になる。

仕事は全くと言って良い程ないけど、神楽ちゃんや新八くん、銀さんと過ごす毎日が楽しくて総悟の事はいつの間にか忘れてた。

銀『久し振りの仕事だあ』

新『本当ですか！？はりきっていきましょう！』

神『また、犬の散歩とかアルか？もっと、マシな仕事持って来いヨ』

文句を言う神楽ちゃんを引き連れて、依頼主の元に向かう。

……居た。

ハム子。

どうやら、依頼と言うよりも愚痴を聞いて欲しかったみたい。

こっちは、報酬の代わりに奢ってもらって聞き流せば良いだけだから楽。

チャラリラチャラリラ ♪

ポケットの中で、携帯が震える。

銀『おいおい。誰だよ。着信音、ゴットファーザーにしてんの…っ

て、お前かあああ！！」

携帯を開いて見てる私に、銀さんが突っ込む。

「……銀さん。私、ちょっと抜けます」

銀「はあ！？おまつ…逃げんのか！？待て！おい！」

ハ「ちょっとお、逃げるって何？ちょーム力つくんですけどお」

神「豚は黙ってる」

ハ「おまつ！豚って誰の事おおおお！？」

皆の言い合いを背中で聞きながら、私は走って店を出た。

・（前書き）

製作中

・

メールの送信者は、総悟。

『万事屋の前に居る』という、簡素な内容だった。

というか、何で私が万事屋で働いてるの知ってるの？

走ってるせいか、万事屋に近づく度に動機が激しくなっていく。

「総悟！！」

沖『おう。どこ行ってたんですかい？』

「ちょっと…仕事に」

仕事と言う仕事じゃないから、口ごもりながら答えた。

そんな私の言葉に、総悟は眉間にシワを寄せた。

沖『本当に仕事だったんですかい？』

「仕事だよ！！ハム子の愚痴を聞いてたの！！」

ムキになる私を見て、総悟は固い表情を崩した。

・
沖『ムキになると、余計に怪しいですぜイ』

そう言いながら、総悟は私の頭を軽く叩いた。

……それは、私が総悟にいつもしていた事。

今の私じゃ、とてもじゃないけど出来ない。

身長のせいもあるけど…理由は他にもある。

「そ…それより、どうしたの？急に。仕事は？」

自分の気持ちを押し殺すように、総悟の手を払い除けた。

沖『巡回中にたまたま通りかかっただけでさア』

何だ。

私に会いに来たのかと思った。

………って！！

私は何を考えてるの！？

私にとって総悟はただの幼馴染みで、総悟にとっても私はただの幼馴染みで…

そう。それ以上の感情は何もない…はず。

・

なのに、何だろう。

この込み上げる気持ちは…。

沖『本当はココ、巡回ルートじゃないんですがねィ』

「え？」

沖『何でもないですぜィ』

ボソツと何か言ったような気がするけど、声が小さすぎて聞こえなかった。

しつこく聞いても、軽くあしらわれる。

懐かしい感じに、このまま永遠に時間が止まれば良いのにと感じてしまう。

この時間が終われば、また別々の道を行くんだろう。

少し寂しい気もする。

そんな気持ちが芽生えるのは、総悟が私にとって長年の幼馴染みだからなのか

それとも……

ピルルル

沖『うおっと。土方さんからでさア。はいもしも…』

土『くおらああー！総悟！ドコほつつき歩いてんだア！？ちゃんと決められた巡回ルートまわ』

ブツッ

沖『あー…耳が痛くなりまさア。土方死ねコノヤロー』

今、はつきり聞こえた。

ココは総悟の担当する巡回ルートじゃないんだ。

何だか、途端に嬉しくなった。

沖『そろそろ行きまさア。うちの副長がつるさいんでねィ』

携帯を閉じると、私の頭に手を置いた。

沖『また、ココ通ったら電話しまさア』

「……うん。必ずね」

総悟は背中を向けたまま、ヒラヒラと手を振って行ってしまった。

けど、不思議と寂しくはない。

また、会える。

そんな気がするから。

私のこの気持ち、恋なのかは判らないけど…

時間はあるんだから、ゆっくりと向き合っていけば良いよね。

END

・（後書き）

あーあ…

このグダグダ何とかならないかなあ↑

今回は、恋人設定でもないし両想いにもなりませんでした。

たまには、こんなのも良いのでは…ないかと…

自信ありませんorz

切ない思い（銀時）

裏注意（前書き）

一部、銀さんが鬼畜な場面があります。
嫌な方はお戻り下さい。

切ない思い（銀時）

裏注意

あるよく晴れた日

私はいつものように万事屋に赴き、掃除をしていた。

貧乏な万事屋で働いても、給料は出ないし…ボランティア活動と言えば聞こえは良い。

何で、こんな事になってるかと言うと…

庭先を掃除していた私に、銀さんが声をかけてきたのが始まり。

掃除をするのが嫌いじゃない私は、銀さんの持ちかけてきた話に二つ返事で聞き入れた。

すぐに他の二人とも打ち解けて、万事屋に行くのが楽しみになっていた。

神『じゃあ、私たち行ってくるアル！！』

新『すみませんが、お願いします』

今日は天気が良く、二人は真選組・局長の近藤さんの計らいで遊園地に連れて行ってもらえる事になったのだ。

二人が居なくなつて、静まり返つた万事屋。

「銀さんは行かなくて良かったんですか？」

銀『俺は行かねーよ。あんなガキが行く所なんてよ』

ソファに寝転びながら、ジャンプを読んでいる。

相変わらずだなあと思いつつ、掃除を始める。

それから少し経って、ジャンプを読み終えたのか、銀さんが口を開いた。

銀『なあ…俺らも遊ばねエ？』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7253o/>

恋時雨

2011年10月7日02時27分発行